

トレパン(ディスポパンチ)を用いた小外科術 小腫瘍切除②

医療法人新生会 八幡病院 皮膚科 部長 前田 学 先生

毛嚢嚢腫

切開線を極力少なくする意味で臍抜き法が推薦されるが、比較的小型で取り切れる場合にはトレパンで全摘する方法がよい。特に背部など真皮の深部にまで及ぶ場合や二次感染後の線維化をきたしている場合には好都合である。

症例は80歳・女、頭部の毛嚢嚢腫(図10a)に対して径3.5mmのトレパンで全摘を施行した(図10b)。

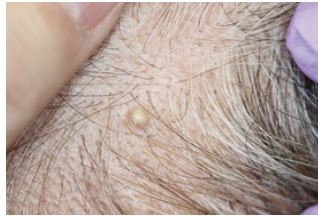


図10a 術前

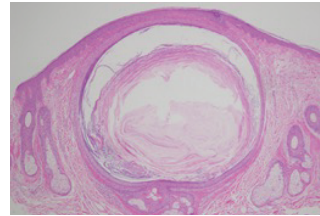


図10b 病理組織像

ガマ腫

舌にもトレパンは有用で、メス刃を用いるより簡便で時間短縮が可能である。

症例は58歳・女、舌裏に生じたガマ腫(図11a)に対して径5mmのトレパンで全摘(図11b)できた。



図11a 術前

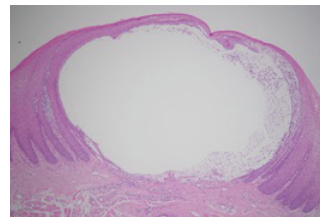


図11b 病理組織像

粘液嚢腫

手指や足趾に好発する粘液嚢腫はトレパンを用いると簡便である。縫合出来ないときは極力縫い縮めて、オープン状態にしても上皮化が期待できる。

症例は68歳・女、右示指の粘液嚢腫(図12a)、径4mmトレパンで全摘可能(図12b)であった。

症例は58歳・男、左足II足趾の粘液嚢腫(図13a)、径3.5mmトレパンで全摘できた。図13bのように病理組織で確認済みである。

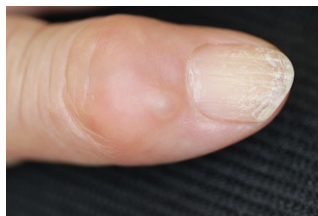


図12a 術前

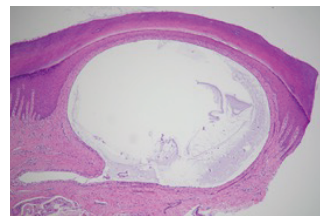


図12b 術後の病理組織



図13a 術前

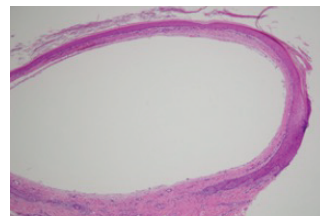


図13b 術後の病理組織

神経線維腫

症例は56歳・女、下顎部に生じた神経線維腫(図14a)、径5mmトレパンで全摘可能であった(図14b)。図14cは抜糸時のものである。



図14a 術前

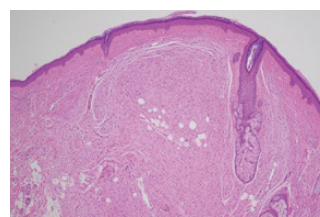


図14b 術後の病理組織



図14c 術後2週間

血管腫

血管腫に対しても比較的丸い形態が多いのでトレパンが適応となることが多い。図15aは耳介後部の85歳・女の老人性血管腫であるが、径4mmトレパンで全摘出した。図15bは病理組織像である。



図15a 術前



図15b 術後の病理組織

血管拡張性肉芽腫

血管系腫瘍は出血が多いので、短時間に手術を終了する必要がある。通常の血管腫同様に丸く左右対称性の事が多いので、トレパンが第一選択となる。以下に症例を示す。

症例は11歳・女、眉間部の血管拡張性肉芽腫(図16a)、径4mmトレパンで全摘した。完全に切除されている(図16b)。図16cは抜糸時のものである。



図16a 術前

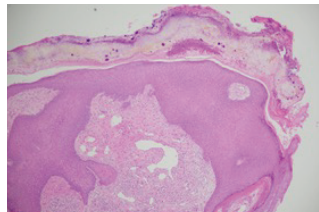


図16b 術後の病理組織



図16c 術後1週間

症例は64歳・女、頭部の血管拡張性肉芽腫(図17a)、径4mmトレパンで全摘し、病理組織でも確認済みである(図17b)。

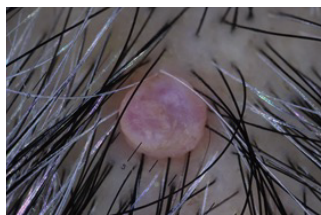


図17a 術前

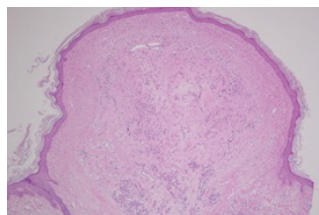


図17b 術後の病理組織

青色母斑

真皮に病変が存在するので、トレパンが第一選択となる。症例は40歳・女、左上腕部の青色母斑(図18a)、径4mmトレパンで全摘できた(図18b)。



図18a 術前

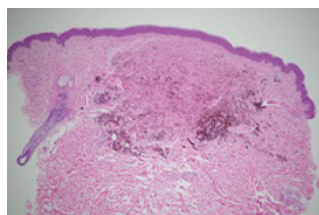


図18b 術後の病理組織

脂肪線維腫ないし表在性脂肪性母斑

皮下に病変が存在する場合にはトレパンが適応となる。図19aは脂肪性線維腫の症例である。径5mmトレパンで全摘出できた(図19b)。

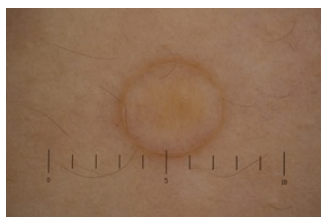


図19a 術前

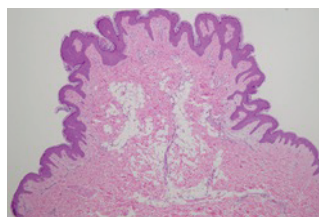


図19b 術後の病理組織

